

「0歳児からはじめる特別支援教育」 ～発達障害の克服の鍵は幼児期にある～

講師 竹内 吉和 竹内発達支援 Co. 代表

1. 学習する力の分類

それでは講義を始めます。みなさんは普段子どもをみていますね。子どもは色々学んでいて、生活している訳ですが、みなさんは子どもがどのような力を使って学び生活していると思いますか。これは子どもだけでなく、大人にも当てはまる質問でもありますので、自分に当てはめて考えてみてください。「あなたは物を学ぶ時に自分のどのような力を使っていますか？」

<受講者からの回答>

聞く力、見る力、直感、触る力、考える力、想像する力、経験を結び付ける力など

皆さん現場経験をお持ちなので明確に答えが出てきました。全部重要な力でしょう。でも全部重要と言ってしまうと捉えられません。哲学者のカントは「物の理解は分類に始まる」と言っています。そこで学ぶ力を分類してみました。

- ① 聞く力
- ② 話す力
- ③ 読む力 文章を読む力ですが、幼児では絵を見る力も入ります。
- ④ 書く力 文字を書く力ですが、幼児では絵を描く力も入ります。
- ⑤ 計算する力 計算を指しているのですが、幼児にはその基礎、物の大きい小さい、長い短い、を見分ける力になります。重要な力です。
- ⑥ 推論する力 予測したり、人の気持ちを察したり、場を読む力も入ります。

学習する力を分類し、それぞれの力はどういうものなのか正体を明らかにしていきましょう。正体が明らかになれば、何か学ぶ力が弱い人間に対

してどんな支援をすればよいか分かります。(表1)のような表ができあがります。私の研修はこの12か所の空欄を埋めていくというのが最終目標になります。これを今からやっていきます。

(表1)

	学習する力	正体	支援
1	聞く力		
2	話す力		
3	読む力		
4	書く力		
5	計算する力		
6	推論する力		

2. 推論する力

まず推論する力から進めます。推論する力とはどういうものなのか体験してもらいます。ペアで行います。資料 27 ページ「セブンイレブンじゃんけん」です。「セブンイレブンじゃんけんぽい」の掛け声でペアでのじゃんけんをしてもらいます。推論する力なので予測しないといけません。話し合うことなく、相手をよく見て何を出すか考え、予測してください。

<体験1>

「0」～「5」の指の数（手の形をグーから指5本まで立てた形で）じゃんけんする。2人が出した数の合計が「7」になるようにする。

<体験 2>

両手を使って「0」～「10」の指の数でじゃんけんをする。2人の出した数の合計を「11」にする。①セブンバージョンと同じ方法。

<体験後の話し合い>

練習をしたうえで、じゃんけんをするとなんかの数のペアが「7」や「11」になった。

なぜ「7」や「11」になったのかを受講者に聞くと「なんとなく」という返答が多かったが、じゃんけんの練習をした際に、相手の出すパターンを推測したという返答があった。

実は、人間は「何となく」ということはありません。過去の経験から推論し行動しているということです。

推論する力の正体は「過去のデータを活かす力」であることが分かります。今回の体験は練習したことにより集めたデータを活かしたというわけです。

もう一つ体験してみましょう。

資料の27ページの体験3です。簡単な質問に対して、ぱっと思いついた答えを紙に書いてみましょう。その時多数派と思われることを書いてください。

<体験 3>

質問 「コンビニと言えば？」

ペアで回答が一致したか確かめたが、回答が合わなかったペアが結構な数あった。

【受講者の回答】

「セブンイレブン」「ファミリーマート」「ローソン」「おにぎり」「ジュース」など

さて、私たちは先ほどから何のじゃんけんをしてきたのでしょうか。体験1、2で「セブンイレブンじゃんけん」をしていたのです。しかしながら、「コンビニと言えば」の質問の答えはセブンイレブンだけでなく、他の店名や、売っているものを答えるのです。これが人間なのです。人間は案外推論する力が弱いのです。だから、打ち合わせが必要となります。

色々なケースを想定してきめ細やかに打ち合わせをする必要があります。過去のデータを活かして推論する力が案外弱いのです。

では推論する力の弱い子に対しての支援方法について考えてみましょう。おもちゃを取ってしまう子どもについて考えてみます。おもちゃを取ってしまった後、取らないように指導する、でも翌日また取ってしまう、これは悪気はなく推論する力が弱いため、過去のデータを活かさない、怒られてもあまりそれが活かされないのです。皆さんはこれの正体が「推論する力」の弱さであることが分りました。だからそこを支援するというのがポイントです。

<ペアワーク>

「おもちゃを取ってしまう子への支援方法について」ペアで1分話し合う。

【話し合いで出た支援方法と講師のコメント】

・おもちゃを分けておく。

→良い方法です。しかし、おもちゃをたくさん買う予算がいります。ほしいものを延々与えていくのは、先が見えないです。

・絵や文字で掲示して視覚的に訴える。

→あると思います。ですが、準備が大変です。

皆さんの答えの他に、実は色々ところで実施している支援で、おもちゃを取ってしまった子どもに「なんで取ったの?」「取られた子はどう思う?」と問いかける方法があります。この方法は推論する力が弱くない子には有効ですが、過去の経験が活かさない推論する力が弱い子どもに対しては、このような「深追い指導」は適しません。弱い子どもにとっては苦痛でしかありません。ではどうするのか。「悪いものは悪い」と教えるのです。「おもちゃを取ってはダメ」と指導するのです。そしてその後に「貸してと言おうね」と手立てを教えます。手立てを添えることが「推論する力」の弱い者への支援方法となります。

一度そのように指導しても、また同じことを繰り返すでしょう。なぜなら「推論する力」が弱い子どもだからです。しかしその指導を続けているとやがて、その子どもが「貸して」と言い出す時

が来ます。実はここからが保育士の腕の見せ所です。今まで言わなかった「貸して」の言葉が聞けた時、必ず褒めるのです。つまり特別支援教育というのは弱さを支援することと言われてきましたが、特別支援の教育の枠組は、正体を明確にする。➡それに基づいた支援を行う。そうすると状況が変わる（動く）ので、➡動いたら褒める。というものになります。

正体を明確にし（ホップ）、それに基づき支援し（ステップ）褒める（ジャンプ）。褒めないと効果はありません。褒めることによって意欲が高まるからです。学習する力を「認知」と言います。生まれつき認知力に弱さを持っている病名は「発達性認知症」と言います。認知の問題ですが、認知を高めようとしても効果がありません。だから支援で意欲を高めるのです。

（表 1 6 推論する力に「正体」「支援」を追加）

	学習する力	正体	支援
6	推論する力	過去のデータを活かす力	結論を先に伝え手立てを添える

3. 聞く力

先に正体について話します。聞く力の正体は「記憶」です。耳からの記憶なので、「聴覚記憶」と言います。

私が数字を言いますので、同じ数字を皆さん言ってみてください。

【受講者】

講師の言った数字を復唱する。

「聴覚記憶」の検査にはこのように桁をだんだん上げて何桁まで返すことができるかを測るものがあります。7 桁が平均と言われています。なぜ指示が入りにくいかと聞いたことを記憶する聞く力が弱いということになります。

<ペアワーク>

「手を洗いましょう」と言っても指示が入りにくい聞く力の弱い子どもをどう支援するかについてペアで 1 分話し合う。

【話し合いで出た支援方法】

- ・視覚的手がかり（手を洗っているカードを見せる）
- ・一緒にやる
- ・話かける前に注目させる

「視覚的手がかり」は教科書にも書いてある方法で、定番なものについては使えるのですが、日々の動きで突発的に起きる事象には準備が追付かず使いこなせないことがあります。急に手を出す、急に保育士を噛むなどのした時に視覚的手がかりは使えません。しかし授業の準備や食事の時の「いただきます」など、定番な事象にはとても効果があります。「一緒にやる」というのはとても良いですが、現実には人員的に難しく、実際に先生 1 人で 10 人の子どもを見ていると他の 9 人がおろそかになります。

「注目して聞いているか分からないので話かけるきっかけを作る（名前を呼び掛ける等）」、この事はみなさん様々に実践してこられていると思います。

声掛けについては「繰り返し支援」という手法を私はお勧めします。言葉だけで何度も繰り返し言うというものです。手を洗わない子どもに対して、言葉だけで何度も「手を洗いましょう」と声掛けをします。他の子どもの対応をしながら「手を洗いましょう」と何度も話しかけることです。言葉だけなので道具もいりません。

どんどん状況が変化したら言葉も変えて何度も繰り返し伝えれば良いのです。

人間、歳を取れば、認知力が落ちてくるのです。例えば、中年の夫に妻がゴミ捨てを頼む時、声を荒げることなく、何度も「ごみを捨ててね」と繰り返し言葉で伝えると、そのうち「うるさいなあ」と言い出します。「うるさいなあ」と言ったということは、頭に指示が入ったということです。内容が入ったといことで、もともと悪気があるわけではないので、翌日ごみは捨てられています。その後、妻は夫にどうしますか。

【受講者の回答】

「ありがとう」と感謝する。

感謝は実は効果がないのです。ほめる事が大事なのです。感謝はもちろんすれば良いし、した方が良いのですが、弱さを持った人は感謝されても何のことか分からないのです。「100点だね」という評価も効果がありません。効果があるのは「褒める」ことです。「褒める」つまり「承認」です。意欲を高めるのは「承認」でとても効果があります。ごみ捨てのエピソードについても夫を褒めることによってやがて毎回ゴミを捨ててくれるようになります。

このように、聞く力が弱い人間も聞く力そのものは、改善しませんが、承認されることにより、意欲が高まるのです。これが特別支援教育です。

「深い指導」では意欲は高まりません。あっさりと支援していくのです。ダメな事はダメと伝え、手立てを伝え、実行したら褒める。これをあっさりと繰り返していくのです。重要なのは幼児期です。土台ができる幼児期に承認を受けて、「先生っていいものだ」、「保育園（所）・幼稚園、学校はいいところだ」、という気持ちになります。小学校に行ったときに、不登校予防にもなります。

「深い指導」を続けると保育園（所）・幼稚園、学校に対し拒否感を持つようになります。だからこの分類した表のように、「正体」、それに対する「支援」、できたら「褒める」という枠組が重要になります。

(表1 聞く力に「正体」「支援」を追加)

	学習する力	正体	支援
1	聞く力	聴覚記憶	視覚的支援 くり返し支援

4. 話す力

次に話す力について話していきましょう。次の体験では話し手と聞き手に分かります。受講者の皆さん話し手と聞き手を決めてください。「話し手」は手を挙げてください。私は今、皆さんに確認をしました。自分の指示した言葉に責任をもって、相手の頭に入っているかどうかを確認することは重要です。その子に弱さがないのであれば、指示したことが入っていない場合、「きちんと聞

いてください」と叱ります。弱さがある子には、支援します。繰り返し伝える、または、視覚的に見せる支援をします。

「聞き手の人は、白い紙を用意してください」(3回繰り返す) 私は、3回繰り返して伝えました。3回繰り返すと、9割の人が理解できるというデータがあります。残りの1割には、個別支援が必要です。個別の支援が必要ない子にも個別支援をしていませんか。まずは、全体で繰り返し支援することが重要です。子どもたちはこれから社会に出ていきます。いつまでも個別支援をしてもらえるわけではありません。自分で自立してやっていけるなら、全体へ繰り返し支援や、視覚支援をしていく方がよいのです。

<体験4>

話し手と聞き手に分かります。話し手は資料9ページの絵を聞き手に言葉でだけで伝え、聞き手にコピーしたかのように正確に描かせる。

【受講者の反応】

なかなかうまく伝えて書いてもらえない。

<体験5>

資料33ページです。「きのう、何食べた？」をする。話し手は料理を思い浮かべその料理を聞き手に説明し、料理名を当てさせる体験。ルールは食材を言ってはいけない。

【早く終わったペアの言い表し方】

料理名：お寿司→海の生き物、生と説明

料理名：カレー→給食、子どもに人気

【遅かったペアの言い表し方】

料理名：カレー→黄色、辛い、スープがある

皆さんの言い表し方から、話す力の正体は何か分かりますか？話す力の正体は「類似」という概念です。類似と言う意味は同じ、似ているということです。言葉と言葉を聞いた時に、どこが同じか、どこが似ているかということを瞬時に説明する力、これが話す力の中核である類似という概念です。

言葉自体は分かっているけど類似点を理解し話す力がないと言葉がぼんやりして、聞く人に伝わ

りにくいです。

例えば、「何が食べたいか」を聞いても話す力が弱いと答えられません。

＜ペアワーク 3＞

「何が食べたいか尋ねても答えが無い時の支援について」話し合う。

【受講者の回答】

具体例を挙げて、選択してもらう。

そうですね。選択肢を提示することが支援です。話す力の弱い人に対しては、類似が分からず答えられないのだから、具体的な選択肢を提示し、話してもらうということが、支援方法となります。話してくれた後は「ちゃんと言えたね。偉いね」と褒めることです。話す力は高まることはありませんが、答えたい（話したい）の意欲は高まります。特別支援の枠組は、褒めるための支援です。

（表 1 2 話す力に「正体」「支援」を追加）

	学習する力	正体	支援
2	話す力	類似	選択肢を示す

5. 読む力

では、読む力に行きましょう。「12 ページを出してください」（3 回繰り返す）私は、3 回言いました。指示が届くように支援しました。基本的支援で動けるならそれでよいのです。集団の中での指導が大切です。発達的な弱さをもった子どもに、療育での個別の支援は意味がありますが、集団の中でどう育てていくのかがもっと重要です。子どもには、みんなと共に生きていく未来があるので、集団の指導の中で育てていくことが大切になります。

＜体験 6＞

資料 12 ページから 14 ページのひらがなの列から意味のある単語を拾っていく、読む力のテストを実際に体験してみる。

この検査は小学校 6 年生のものです。15 ページのテスト結果の解釈から、第 6 学年の欄を見て

ください。結果で単語 8 個以下は A（下位 5 %）9 個以下は B（下位 10 %）です。A に属する者が医学の世界では「読み障がい」と判断します。保育・教育の世界では、弱さをもつ子どもを広く見つけたいので、下位 10 %を「読み障がい」と捉えます。この検査で 20 個や 25 個読める者もいます。読む力というのはスピードであり、それは本をどれだけ読んでいるかで判断できます。読む力は理解力と別のところにあります。分かっているし、よくしゃべるけど、読むスピードが遅いだけということもあります。人は弱い部分を隠そうとするので、読む力が弱い場合でもカムフラージュします。そのため保育士、教師が発見して支援することが重要になります。教師が読むスピードが遅い（読む力が弱い）ことを理解しないと、本人が自分に理解力が無いと思いこみ劣等感から不登校につながるケースも実は少なくありません。発見し支援すれば不登校には繋がらないかもしれません。

「読む力の弱さ」は年長で発見することができます。絵本が嫌いな子どもは、読む力が弱い可能性があります。

＜ペアワーク＞

「理解力はあるが本が嫌いな子への支援方法について」話し合う。

【受講者の回答】

- ・読みやすいように区切りをつける
- ・代読

「読みやすいように区切りをつける」という回答は、支援としてはあると思いますが、この方法は読むスピードの改善には繋がりません。読むことにこだわることは、今の世の中では必要ありません。ですから「代読」は支援方法として成り立ちます。現在はスマートフォンやタブレットを使い、音声データで対応するという方法もあります。読む力が弱くとも、理解力があり自分で対応する方法を身に付けていけば、先進大学にそういう支援方法を使い入学することも可能です。ただし、高校まで事前に「代読」の支援を受けていること

が大切です。読む力が弱くても研究者にもなれるのです。

そういった支援の基礎の部分は幼児期にあります。幼児期に読む力の弱さの片鱗が現れます。自分から絵本を読むことが少ない子どもは読む力が弱いかもしれないので、読み聞かせはとても重要です。読み聞かせをしている時に日頃絵本を読まない子どもが読み聞かせに参加してきたら、「えらいね」と「褒める」ということが支援になります。

(表1 3読む力に「正体」「支援」を追加)

	学習する力	正体	支援
3	読む力	スピード	代読

6. 書く力

では、書く力についてしていきましょう。

<ペアワーク>

書く人と見守る人(先生役)に分かれ、資料11 ページ迷路課題を利き手の反対の手で実施する。

先生役は「ストップ、最初から」「おそい、はやくはやく」のみ声掛けをする。

先生役も書く人も色々な思いが錯綜したと思います。

やってみてどんな気持ちだったか受講者の意見を聞きましたが、実際「書いた人」の気持ちは焦ってしまうという意見があり、先生側は決まった声掛けのみをしながら、心の中で「頑張れ」と声をかけるという意見がありました。

書く力の弱さのない人に対しては「もっと速く」や「頑張れ」のことばは有効ですが、書く力の弱い人に対してはそれらの言葉は意味のないものです。的確に支援を行うことが重要です。

書く力の正体は「不器用さ」であり支援としては「時間の延長」「時間の保障」「黙って見守る」ということになります。

本日は「計算する力」までできませんでした。これら6つの力は関連しています。時間が来ましたので本日はこれで終わりにします。

(表1 講義後完成表 講師の板書より)

	学習する力	正体	支援
1	聞く力	聴覚記憶	視覚の手がかり くり返し支援
2	話す力	類似	選択肢
3	読む力	スピード	代読
4	書く力	不器用さ	時間、見守り
5	計算する力		
6	推論する力	過去のデータを 活かす力	結論を先に 手立てを添える

ほめる

意欲

承認

令和8年度 第4回共同機構研修
令和8年7月23日
京都市子育て支援総合センター こどもみらい館